趣旨説明及び共同研究について

東京文化財研究所
文化遺産国際協力センター長　中山　俊介

昨年度、佐賀大学芸術地域デザイン学部と東京文化財研究所は、染織文化財等の保存に関する共同研究を締結いたしました。この共同研究を締結させていただくに当たり、東京文化財研究所としてはこれまで調査研究してきました伝統的な染織品の保存と修復に加えて、近代に制作された列車や自動車などにも使われております染織品も含んだ染織文化財の保存と修復、さらには海外に残されている染織品の保存と修復に関する国際協力に関して協力いただきたいというニーズがありました。

一方、佐賀大学では、昨年立ち上げられた芸術地域デザイン学部におきまして、芸術を通して地域創生に貢献する人材の養成を目指しておられるということで、その中でも染織文化財に関する保存や修復あるいは取り扱いなど、これまで学ぶ機会が少なかった分野に関して新たに触れる機会、あるいは学ぶ機会をつくろうとされており、それが佐賀大学の将来ある若い学生の皆さまの職業、あるいは将来を選ぶ上で選択の幅が広がることにつなげていけるという思いをお持ちでした。そこに東京文化財研究所が、協力させていただけるという判断の下に締結させていただいた共同研究です。

文化財というものは、多種多様な素材で形作られているものが一般的です。中には単一の材料で出来上がっているものもありますが、多くは、複合的な材料で構成されております。そのような中に染織品も当然含まれます。染織品と申しましても、服の形をしているものばかりではありません。壁や天井の装飾、床に敷かれたカーペット、窓にかかるカーテンあるいはソファーなどの表地であったりします。そのようなものに関してこれまであまり注意が向けられてきたとは言えません。そのよい例として近代文化遺産として重要文化財に指定されている１号御料車の内装があります。装飾品として認識はされるもののそれ自体の価値を認められてこなかったために顧みられることなく痛みっぱなしという状況でありました。もちろん、これは様々な要因があるとは思いますが、一番は価値が認められなかったこと、次にはそうした染織品の修復を専門に行う技術者の数が極端に少ないことがあり、修復あるいはメンテナンスをするにもどの様にすれば良いかわかっていなかったことが挙げられます。現在佐賀大学の准教授をされている石井先生はそうした数少ない染織品の修復家のお一人です。今回この共同研究をスタートさせていただいた背景には石井先生が佐賀大学にいらっしゃるということも理由の一つです。

東京文化財研究所文化遺産国際協力センターは、海外にある文化遺産の保護と修復に関して協力をさせていただいている部署になりますが、紙、漆、加えて染織品というこの３つの分野に関して海外で保存や修復などに関するワークショップを開催させていただいております。この中の染織品に関しては、石井先生にご協力いただいております。また石井先生なしには成立しないプロジェクトと言ってもよいと思います。

前述したように染織品の保存と修復に携わる方が少ないのは事実ですが、その様な状態でも、なかなかそうした方々が一同に介してお話をいただく機会というのはこれまであまりありませんでした。今回、本共同研究のキックオフとしてお招きしてお話いただく講師の先生方は、それぞれ、国内で染織品の保存と修復を担っておられる皆様です。今回は非常に貴重な機会だと言うことができます。この機会にそれぞれの先生方から所属されておられる博物館の保存、展示手法や修復の現状をご紹介いただきながら、それぞれの違いを認識し、それをもとにさらに良い方向へ進んでいければと思います。また、欲を言えば、それが日本の中の染織品の保存と修復のスタンダードへ育っていけば良いと思っています。もちろん一足飛びにそんなものができるとは思っておりませんし、それなりの時間もかかることと思います。また、必ずしも手法は一つでなくても良いかもしれません。しかしながら、それぞれの違いを認識しながら良い部分は取り入れるというステップがなければ、進歩もしません。そういう意味で、今回の

この研究会が皆さんの役に立つことを強く望んでいます。

さて、東京文化財研究所では世界の幾つかの地域でワークショップを開催していると前述しました。今年も染織品に関しては、台湾とアルメニアにおいて染織品の保存と修復に関するワークショップを開催します。そのようなワークショップを開催してみて気付くのは、ワークショップへ参加を希望する方の多さです。和装の装束を所蔵されている博物館や美術館の担当者の方はもちろんですが、対象とする作品が大礼服のような洋装であっても参加されたいと希望される方がたくさんおられます。洋装に関してはヨーロッパなどの方がよほど進んでいるのではないかと思いますが、実はなかなかこういう機会はないようです。そのような背景もあり、たくさんの皆さんの参加希望をいただいたわけです。我々も、これまでこの手のワークショップが開催されているのかリサーチしたことがなかったので、実態をきちんと把握しているとは言えませんが、このようなワークショップのニーズは高いのだという認識は持てました。

今回の研究会を端緒として、これからも類似の研究会を開催しながら染織文化財の今後を見つめていきたいと思います。

最後になりましたが今日、この場に来ていただいている皆さま方、ご講演いただく先生方、小坂先生をはじめとする佐賀大学の関係者の皆さま方のご協力にお礼申し上げます。